



TITLE:

美学における自然と現実 - 美学思想史的考察(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

金田, 民夫

CITATION:

金田, 民夫. 美学における自然と現実 - 美学思想史的考察. 京都大学, 1970, 文学博士

ISSUE DATE:

1970-01-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213272>

RIGHT:

【 12 】

氏 名	金 田 民 夫
	かね だ たみ お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論文博第48号
学位授与の日付	昭和45年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	美学における自然と現実 —美学思想的考察—
論文調査委員	(主 査) 教授 井 島 勉 教授 野田又夫 教授 辻村公一

論 文 内 容 の 要 旨

美的自然の概念は、18世紀後半の美学理論の上に重要な課題を担うものであった。著者はこの概念の成立を「序論」において、二つの観点、即ち古典主義的伝統における美的調和を求める芸術思潮と、当時における有機論的世界観・汎神論的自然観から捉えた。かかる立場に支えられて提出された「美的自然」の概念であり、従って「自然」の問題は、当時の美学における単なる周辺の課題ではなくて、むしろ美そのものを問うことのうちに必然的に取りあげられるべき根源的な意味を含むものであった。著者は近世美学において自然が一個の「美的なもの」として理論化され体系づけられた点に着目した。

美的自然の問題が、当時の美学思想の中に如何に重要な意味をもって追究されたかを論証したのが「第一章」である。ここで著者はシラー・シェリング・ヘルダーらの美学理論において、「自然」がそれ自体美学的性格をもつものとして美的原理性のうちに捉え、それによって一個の「美的なもの」としての対象的意味から、更に美的理念性における創造的作用を内包することの意味が展開されるに至る発展史的構造を見出すことができた。

ところで18世紀における「美的自然」の問題は、「美的なもの」が常にそれと結ばれねばならぬ精神的内面の世界との連関のうちに、人間の内的主観についての課題をも含んでいた。殊にカント美学において、自然の問題は常に「主観の感情」との関係のうちに考察された。むしろ主観における「内的調和の感情」の中に美的原理性を探ねることが、彼の本来的な意図であった。そこで著者は「美的なもの」に対する人間の内面の世界を意味すべき「美的感情」の本質について、「第二章」において検討を加えた。

さてヘルダーにおける「美的自然」は、その創造的な性格において「民族」の概念と結ばれていた。著者はそこに現実的な人間や民族の精神の中に美的原理を追究すべき方向を見出した。19世紀の美学思想において「美的なもの」が「現実」そのもののうちに探ねらるべき萌芽をそこに発見した。「第三章」における「美的現実」の問題は、この意味において、19世紀から現代に至る美学思想の発展過程のうちに「現実」の概念が美的意味において如何なる展開を遂げるかという問題の考察であった。そしてここでも、リ

アリズム的芸術思潮における「客観的現実」が、ティルタイの所謂「生命的現実」の概念を媒介として、美的現実そのものの存在論的根拠を探ねるべき美学の新しい方向を見出すことができた。

著者は「結論」において、美学における「自然と現実」の問題が、本来的に一個の「美的もの」として追求される限り、「美的存在」の本質を探ねる課題を含むものであったことを究明した。そして美とは何かという問いは、また必然的に「美的なもの」の構造を解明し、「美的存在」の意味を探求することによってのみ真の答えを見出し得るものであること、換言すれば「美」の本質についての理解は、常に美学思想史的な考察を通してのみ始めて解決点に到達し得るものであることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

「美学における自然と現実」と題する本論文には、「美学思想史的考察」という副題がつけられている。著者のいう美学思想史的考察とは、美学思想の平板な歴史的叙述にとどまるものではなくて、美学思想の発展の根源を追求することを通じて、普遍的美学の根本問題を究明しようとするものである。このことは本論文の一つの重要な特色であるとともに、その意図におおむね達成されたものと考えられる。

18世紀後半と19世紀は、西洋美学の大成期に該当する。前者においては主として自然の概念が、そして後者においては主として現実の概念が、それぞれの美学思想の根拠にすえられていた。著者は重要な代表的美学者たちの思想に綿密な検討を加え、いわゆる自然や現実が、実は「美的自然」もしくは「美的現実」を意味すべきものであり、従ってそれらは、単に対象的または客観的な意味においてのみ語るべきではなくて、むしろ美的直観の作用性そのもののうちに、本来的に美と芸術の基底となるべきもの、いきおい美と芸術における内容的なるものとして追究さるべきものであったことを明らかにした。当然、美学における自然と現実の問題は、芸術的創造作用の解明の重要な鍵となることが指摘された。

如上の理論的展開のたに周到に準備された著者の視野ははなはだひろく、観念論的・理想主義的美学の系列のみならず、唯物論的美学の批判にも及び、更に、美学における自然と現実の問題が、20世紀的には、美的存在に関する存在論的究明として展開される過程にも触れている。

一般に美学思想は、その時代の公衆の美意識や芸術観もしくは芸術思潮と無縁ではない。従って美学思想史的研究も、この点に注意を払うべきであるが、従来の一般的研究においては、ややもすればこの点が等閑に付されがちであった。著者はこの点に想いを致し、殊に18世紀的な古典主義的芸術思潮、19世紀的リアリズム芸術観（社会主義リアリズムを含む）とそれぞれの時代的美学思想との内面的な連関に注目し、更に、やや簡略に過ぎるうらみがあり、ままた適切な定式化が見受けられるが、現代の芸術思想と存在論的美学との関係も見のがしてはいない。これらの着眼は、本論文の一つの特色として、高く評価さるべきものと思われる。

以上、審査するところにより、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。